

日本百將傳一夕話

十

2333

日本百將傳一夕話卷之十



東都

目錄

○楠正行

○源義助

○足利高經

○細川定禪

○赤松則祐

○桃井直常

松亭金水謹撰

- 山名時氏
- 新田義興
- 菊池武光
- 楠正儀
- 足利基氏

以上十一將目錄終

永田姓

ヨリ要如レ



楠正成 河内判官

正行 左衛門督

正之 大和守

正儀 檢非違使 左工門佐

正勝 檢非違使 左工門佐

正元 楠小次郎

正教 池田十郎 兵庫介

正行 勘後三池里 末正教ヲ坐

楠正行

人皇十代 光嚴帝貞和五年青戦死
今安政三辰迄 五百八年 成

楠正行者正成子也年少有父風維

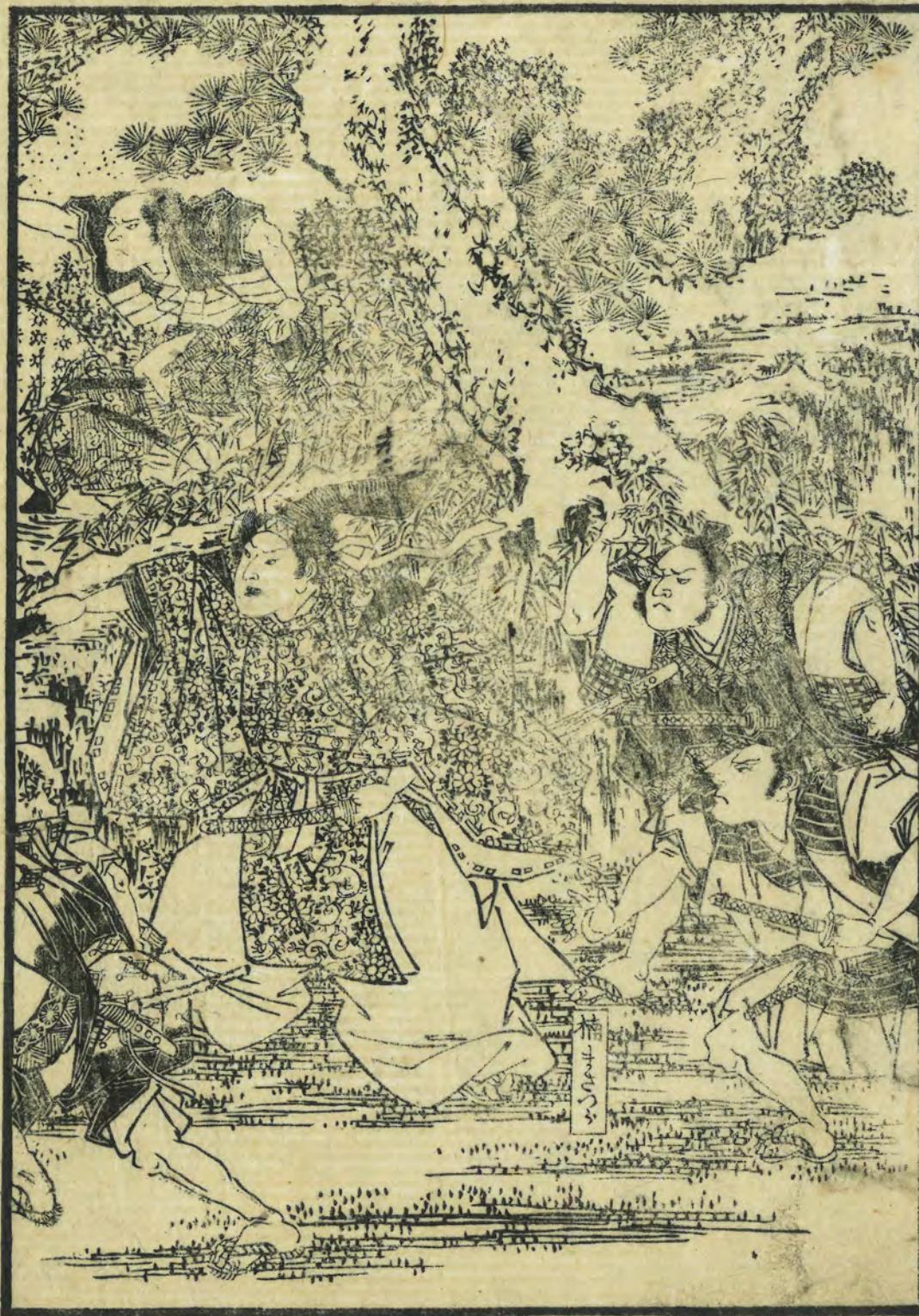
勵繼志之思不幸没于軍吁惜哉

正行櫻井の源小治で父正成は兵庫小従りしに正成とを論してのち源を遺す
恩愛の爲れあり父王室恢復の功を遂るなり。別まを懐き恩愛の爲れあり
小ありとありけしが正行櫻井とを懐き夫より河内へ引返り年甫十なり父
父源河内戦死し。その骨をるるに及び持佛堂入て自害せんとす時父源大北に父
の遺言を忘れずや。あふ死を何の益ある。と其の力を奮ひけしが正行源を止
す。夫より多量復讐を志し然とて中多病なり。其の時至らざと父を懐き
小死さ何の面目あるや。と軍を起て竟に自盡し。吁惜哉其の英雄なり。

年あきまゝ

是に楠家二世の忠のつゞきに思ひあひつゝ、いづれも正行が忠孝杖屨に對する心成が智慧量天
 下後世にこれを蜀の孔明に比し、孰も信ぜざる者なり。然るにその時小幡が新田義貞北畠
 顯家名和長年千種顯忠その他餘の將士多くて、聖徳もまた登壇して練計智略も其圖
 小幡も百戰百勝の功を究む然るに正行の世小幡といふ是利氏北朝の天子を挟んで新從多く日
 本を平らけりて、その武令に應ぜざる者僅に三及び四に楠正行とを獲つて六十餘とて教と
 ありし志を遂げざる忠孝を守はる金腰鐵腸億兆の人も勝まざるを克するに南朝正平二年の
 北朝貞和二年次は、この年正行二十五歳なり、尙須臾の餘を懷き、とて志を遂げざるも
 時を俟ていまだ軍で登せざりしが、正行平生に志あり固て諸良を集めていそ。嘗て父の
 體に其共小幡を載せ、父戰没の後數年に在て更に兵を起さざりし、その時の臻られざるに
 日蓮を病み、其且暮に死す、何の面目あるて是を地下に見あるとて海に固て今兵を起し敵

と雄略を以てせんと欲せば、其のつに男とあるに諸君よ、此に應に。因て正行軍を起し。まづ、
及天竺寺に屯し、是利吉氏を正行に受て、細川顯氏等と協同して、三万二千餘騎を以て、正行を襲ふ。
正行、敵の多きを以て、其の兵を分ち、為兵として、千餘騎に俾り。和田等がて、和泉の城を守りて、
其の弟新發意源秀下を、八尾の城を守らしむ。顯氏、彼等の橋小幸り。正行の兵在るを以て、
四万餘騎を下を、矢尾に赴く。二千六百餘騎を和泉に赴き、躬て千二百餘騎を以て、千餘騎を以て、
橋小幸に赴き、正行を以て、矢尾に赴く。兵を八幡の山下に匿し、先兵を以て、矢尾の降人を以て、顯
氏を陳に至し、まづ、別小使を以て、和泉の城に新發意源秀、貴陳に降参せんと欲す。義昌を
以て、即刺至らんと欲せける。顯氏、彼を以て、大小喜び戦ず。二隊降る。正行、軍情を以て、
油断を在ける所、小正行七百餘兵を率ひ、旗を卷き、敵を以て、進に進で突戦し、伏する所の
奇兵を以て、前後より襲ひ、攻む。顯氏、大小損傷を以て、二隊降る。正行、軍情を以て、
小正行を以て、四百二十百八十餘騎を以て、顯氏、漸く脱を以て、俾り。正行、兵を以て、初に、



正行途小

辨内侍

難

拯ふ

嗟正行仁とて。軍陳小教を尊む君父の爲世の爲りて人を殺して悔むはあらず。軍陳満ちて。愛憐とて援の還に如たの人小に。竟小本を達せざる。実小天命あるのあらん。かくてその年暮と負和五年。南朝正平四年なり。この年正月。夏利を氏執り高武義守師連を弟師泰に令下。再び正行を撃んとて。六万餘騎の勢を授く。高の西伯隊伍を備て。脱に洛を進發せし。正行名中に死を決し。弟正時及び一族を引。芳野の官小續や。四條中納言隆資を率て。奏す。小及びける。亡父正成龍騎とて。先帝の令て受天教を推さる。軍小排ふ。然れども。敵子あらず。城西海小流て。幸歲に侵る。勢の對ま。さる。身て。節小殉ふ。時小長歳十三。櫻井の記より。こを傳て。教るに。殘る所の一族を投。一軍を。力。場。朝家。守れ。と。微。居。父。令。て。容て。故。小。級。の。諸。子。を。枕。と。塊。に。伏。て。鎧。を。付。ま。す。と。志。ま。さ。る。と。も。長。多。病。多。り。且。暑の。令。算。る。べ。う。び。美。統。小。牖。下。に。死。さ。る。與。小。天。を。戴。く。の。事。と。違。ま。さ。る。今。般。の。軍。教。の。あ。る。

師連が首と獲て。降頭小貫く。も。我。首。を。渠。小。授。る。ま。の。兩。事。と。決。ま。さ。る。再。小。降。り。泰。り。ト。と。存。ま。さ。る。天。顔。を。拜。ま。さ。る。と。今。日。と。涯。ま。り。と。忠。志。言。語。小。顯。ま。る。美。情。面。小。溢。ま。け。る。天。皇。南。殿。の。口。簾。と。捲。せ。正。行。を。召。す。て。の。も。正。成。以。來。救。済。の。功。大。教。を。拜。ま。て。朝。室。を。援。く。累。世。の。忠。勤。比。ひ。舞。れ。る。然。れ。ど。も。凶。賊。多。く。今。般。ま。と。師。連。等。大。兵。を。盡。し。未。だ。攻。む。実。小。天。下。安。危。の。秋。の。一。舉。に。繫。ま。る。な。り。汝。股。肱。の。力。を。竭。し。法。教。を。挫。ぐ。べ。く。朕。が。憑。む。所。の。股。肱。を。汝。人。の。こ。と。敵。慮。の。む。と。畏。ま。る。正。行。更。小。言。語。あ。く。後。と。無。て。退出。し。夫。より。先。帝。後。統。の。朝。小。綱。し。正。行。正。時。以。下。の。兵。士。百。四。十。人。の。姓。名。を。壁。小。記。し。死。て。美。て。前。前。と。ま。る。小。師。連。師。泰。に。六。万。餘。騎。の。大。兵。を。率。ひ。四。條。邊。に。軍。以。南。軍。四。條。隆。資。小。和。泉。紀。伊。の。野。士。三。万。と。率。て。飯。盛。山。小。登。つ。て。陳。ま。正。行。正。時。餘。騎。を。率。て。七。の。軍。で。一。隊。小。り。今。日。の。戰。ひ。に。亡。父。淺。川。の。事。に。因。り。各。い。ち。の。居。ふ。な。り。心。力。を。竭。し。て。り。先。君。を。奉。む。る。あ。ま。と。緒。卒。び。て。志。氣。を。離。れ。る。系。軍。縣。下。野。守。ま。と。武。田。伊。豆。守。兩。軍。未。だ。見。に。對。ま。

正行が兵死力とて、一に退崩す。因て長湯資宗を、松田重明、青砥有元、入替つて
 突戦せしむ。木道等も連兵勝つて。午餘湯出で正行が兵小少とて挑み戦ふ。正行の後
 軍大不潰え、残る所、百餘。正行左右を背き、大不呼つて、常戦し、一りて午に、大軍大
 不披き、魔き。正行師連と隔つる。午歩ありある。正行飲み面、揮き、墓地、不流通。
 師連、幾死きとて、う。と、う。師連、在門ある。老、延隔て、師連と名を、て、不戦死せり。正行其
 首を、獲て、大不悦び、將く軍で、馳り、同、不師連、度き、脱とる。脱、外で、師連不、非ざるを
 知つて、怒に、後、不獲、怒んとせり。と、の、不、遙、不、活、伸、り。と、不師連が、兵、須く、木、四、師、夫
 を、致つて、と、を、防、正行、正時、中、を、彼、う。師連、獲、へ、と、を、不、時、不、謂、て、い、も、
 と、い、不、忠、不、死、し。と、と、と、不、考、不、死、ま。と、如、今、俱、不、と、を、得、う。と、同、胞、乳、軍、の、中、不、自
 殺、ま、す。時、正行、二十五歳、呼、惜、む、と、

其先新田義貞の
 弟なり

源義助

人皇九十九代 光明帝 建應三年 育卒
 今安政三辰迄 五百十七年 成

朝氏 新田三郎義貞

義貞 左中將
 從四位

義助 正五位下

義治 左衛門佐

成テ四國へ渡ル

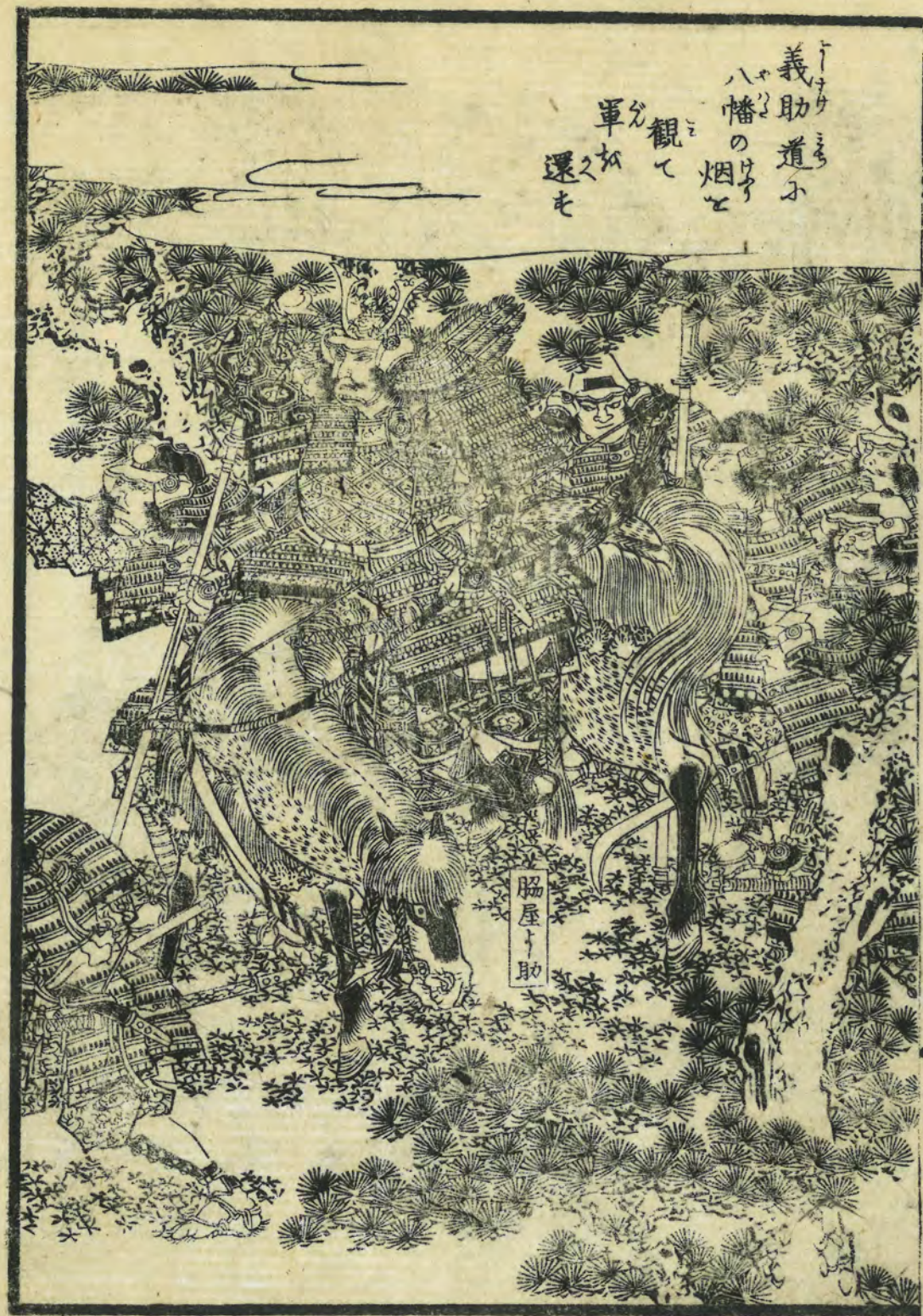
源義助者、義貞弟也。號脇屋。初、義貞之討高時也、義助
 勸義貞速起義兵。既而高時殲、以功賜駿河國。泊義貞之
 伐尊氏也、義助奉皇子赴下官軍。不利、義助力戰、拔其子
 義治于萬衆之中。其勇銳不少。義貞尊氏比年之軍、義
 助常有其勞焉。義貞死、越前黑川城下、義助憤耻、奮
 勇、隨之。其後到吉野、受南帝命、而赴南海。將再倡大兵、未幾而卒。

源義助の結

王室恢復大功ありて。諸勳賞の時ある。後河の國を獨りて。元就前小のえ言
じ。然るに建武の乱起る。尊氏氏東の威を張る。及びて。兄義貞不従ひ。一箇中務親王
を奉じて。作の下に。敵小對。大不勇威を奮ふ。このども。衆寡敵せず。元就の義貞
由散兵を集め。遂に敵を防ぐ。とある。天皇これを徵し。より。義貞等の諸將。係
せり。その後。尊氏系師。と。義助。小防ぎ。け。軍利ありて。引返す。天皇。敵に避
る。元就。元年。春。月。赤松朝家。小叛。て。義貞。うち。向ひ。て。と。攻む。然るに。城固。し。て
難く。援。ぎ。ず。時。義助。義貞。小。謂。て。い。ふ。尊氏。大軍。を。帥。て。帝都。で。犯。す。君。上。お。と。る。優。身
一城。小。拘。む。る。ひ。兵。を。鈍。う。さ。う。と。策。に。あ。る。む。如。し。この。圍。を。棄。て。西。へ。逃。げ。て。義貞。是
を。察。り。て。義助。に。兵。三。万。を。授。け。中國。を。征。せ。む。義助。軍。小。わ。り。て。備。前。小。到。る。赤松。兵
丹波。の。險。小。把。て。と。と。を。防。ぐ。同。て。中國。の。路。通。せ。と。小。還。ま。り。數。日。あり。と。小。向。濟。の。部

高徳使を遣て。義助に。必勝の利を告て。躬。然。し。小。記。り。し。の。義助。大。小。款。び。て。其。計
策。小。應。下。けり。高徳。僅。小。二。千。餘。騎。と。小。し。つ。て。威。を。示。さ。義。該。て。丹。波。を。棄。然。小。お
む。高。徳。數。千。餘。騎。と。小。あ。り。丹。波。の。途。を。周。り。義。助。之。の。南。小。空。ま。り。賊。前。後。小。敵。て。受。旗
旗。を。棄。て。遁。ま。さ。は。義。助。備。前。美。作。小。入。て。多。く。殺。城。を。降。し。け。り。小。於。て。義。助。が。勇
名。中國。小。輝。り。然。る。に。尊。氏。大。軍。を。率。て。海。濱。より。攻。登。る。の。を。義。貞。告。て。義。助。を。招。き。是
と。共。小。兵。庫。小。陳。ま。る。の。時。の。賊。以。正。成。開。死。し。義。貞。兄。弟。敗。せ。り。兵。を。解。め。て。洛。小。降。り。と。
義。貞。と。小。遊。る。人。夫。より。義。貞。妹。を。宣。め。賊。を。討。ま。さ。と。官。軍。振。り。ま。る。尊。氏。奏。し。て。先。帝
級。洛。ま。る。尊。氏。親。王。を。託。し。義。貞。兄。弟。北。國。小。赴。り。む。義。貞。賊。前。金。が。誘。小。入。さ。義。助
小。千。騎。を。屬。し。瓜。生。保。が。北。山。の。城。小。入。ま。り。む。小。良。利。尾。張。守。高。經。令。と。受。て。三。方。餘。兵。集。み
洛。の。城。を。圍。む。と。さ。う。高。良。利。等。經。同。を。い。て。保。を。破。り。我。軍。小。降。り。む。保。が。弟。義。經。房
是。を。知。て。義。助。小。請。ひ。し。の。子。義。治。を。止。め。と。義。助。渠。が。貳。萬。を。率。り。て。義。治。を。託。し。其。外

義助道小
八幡の煙
観て
軍
還る



脇屋助

百将傳

群玉堂藏板



百将傳

八

群玉堂藏板

金が誘ふ入らんとて從ふ所の兵士等。まゝ足利の威風を恐るゝ。あゝとてなり逃きて僅
小猿の股肱の足十六誘ふりけし。今奈何と申方。義助義顯義助義顯の自殺せん自殺せん
とて千晴栗生た天門ののそ。敵を欺きて城に入らん。若敷欺きとて選ぶ。一戦して死すべき
の。と十六誘ふ。然とて。栗生夜ふ。あど旌旗を遣ふ。とて樹梢小懸へ。黎明ふ及
び近所の兵援ひふ。来る様ひをよむ。果して兵とて小懸る。義貞城沖より兵を以てあ
けて両方を救ひふ。兵とて逐討せり。その氏ゆて大に怒り。仁木頼章高師泰三招てて援兵と
し。まゝ金が誘ふの城を圍むかくて建武四年にあたり。瓜生保高師が招き小僧下。且ハ義
貞小教さぬとて。義隆小若野不幸。南朝と称し。徳園の勢群集する。とて及比謀と新田
小通下。金が誘ふの圍より潛小遁とて。松本帰る。義隆唐大に飲ひ。義隆をわとて。金が誘ふで救
ふとて。高師泰とて。六千餘誘ふ。小向ふ時小降雪。城と湮る。系軍寒氣小苦めり。瓜
生保とて。義貞。夜ふ。あどて敵を誘ふ。系軍大に潰え奔る。とて擒ふ。せざる。の二百餘人逃營

後者救せんとむ。師泰先途の恥辱を雪ぐん為小二万餘騎の兵を平一討て
 出候祖小侍て運ひ聞ふ杜山の兵大敗す。伊賀守以下保義鑑房の役小死せり。京軍
 頻々小威を震ひ小令とて金ヶ浜を千重千重にうち圍む。時小城中糧乏く牛馬鷄犬を食
 ふ小至る義貞義助軍士の窮乏援け為小城を出杜山小入て軍兵を集めんとせむ。應ず
 老なく妙針竭て流小救目て経きど備果さむ。城中いやく糧小迫り。食むと十餘日経めき
 斃るのこそ奇き機を得て連小攻む。城兵防ぎて能はざる。尊良親王及び義顯自殺。菅原恒
 良親王ハ擒はして系小入る。明日ハ督應元年とす。義貞義助死す。千餘騎乃
 兵と聚め再び討て出んとす。氏岐て高麗小六千餘騎を援てきて撃つ。む。其の戦ひは
 京軍慮大小相違して府の城小降りぐ。今つて足羽の城小入る。小於て國中の兵招く。小
 官軍に帰し。義貞義助威を振へり。あ。小北畠顯家ハ安倍野小死死し。八幡の城小終

新田義興が軍兵を大に屈せしむ。南幸康筆の勅書で福八幡を赦ふ。
一と詔令あり。義興は長門の躬行を九の墨を圍み。義助小三万騎を副へ。八幡の城を擧げ。
一と義興氏にて八幡の攻兵高師重忠を以て告ぐ。師重慮り。城責のて縦をそひ。悪くせん。
と火を八幡の神社に放つ。城兵頗る小に復損する。義興城附とて。義興城の中。九
郎との老力百人小對せし。どもの性怯弱。して股慄き。とて。義興に。さる。木十郎小助
さま。今。て。棄て。敵。小。白。ひ。大。石。大。木。下。以。て。小。堅。さ。て。漢。小。偏。死。する。の。甚。多。し。未
其。を。と。て。さ。退。く。義。助。の。時。數。矢。に。在。て。八。幡。脱。小。偏。と。以。ひ。速。小。來。り。援。む。城。中。益
困。之。頭。佐。義。興。夜。小。三。下。城。を。出。て。身。を。匿。ま。義。助。も。さ。兵。を。引。て。城。前。へ。陣。り。け。り。初。て
後。七。月。二。日。義。興。軍。九。の。城。を。攻。て。流。矢。小。令。を。殲。む。義。助。も。さ。と。て。知。る。石。九。の。墨。に。陣。り。
已。小。で。と。て。天。小。怒。て。墨。九。を。垂。小。屠。せ。し。と。せ。り。ど。も。諸。軍。上。將。の。戦。死。せ。て。城。中。力。弱
す。大。に。一。落。ぬ。と。て。殘。る。兵。二。千。可。義。助。余。何。と。も。さ。る。と。なり。河。島。某。と。て。三。峰。の。城。を。守。せ。

烟六郎左衛門を以て。漢の城を守り。瓜生すとね。山を守り。せ。其。身。の。後。治。て。府。の。城。小。入。
を。年。八。月。後。醍。醐。天。皇。芳。野。の。宮。小。崩。潰。あ。つ。て。自。皇。子。義。良。臣。小。郎。多。ひ。と。て。後。村。と。天
皇。と。是。を。義。助。が。年。府。の。城。小。還。つ。兵。を。集。め。て。墨。九。を。攻。落。さ。し。と。る。新。天。皇。の。崩。潰。小。遭
ひ。諸。軍。も。小。機。を。失。ふ。因。て。皆。く。敗。止。せ。小。芳。野。の。新。帝。より。賊。徒。追。討。の。論。有。り。給。け。り。
大。小。敵。は。暴。小。勢。を。結。り。ひ。て。國。府。へ。奉。り。て。救。城。下。一。機。を。飛。て。兵。を。募。は。烟。時。能。も。漢。五
金。津。長。河。合。河。に。救。城。を。援。て。義。助。小。會。を。由。良。光。氏。城。に。氏。政。各。兵。を。率。て。救。城。を。請。り。
義。助。小。會。一。け。り。その。勢。都。て。七。千。餘。騎。垂。小。墨。九。の。城。を。圍。む。城主。尾。張。守。高。師。八。郎。守。
と。て。と。ま。を。防。ぐ。城。兵。上。木。兵。九。郎。家。光。の。美。見。小。就。て。高。師。火。を。城。小。放。ち。夜。小。不。ト
て。高。師。の。城。小。入。は。あ。り。於。て。服。屋。義。助。猶。く。威。を。振。ひ。け。り。高。師。さ。り。と。尊。氏。小。告。ぐ。
尊。氏。は。て。ま。は。頼。連。作。木。氏。頼。將。と。て。義。助。を。疑。む。義。助。一。戦。小。利。を。失。ひ。城。中。棄
て。根。尾。小。會。の。系。兵。續。て。と。ま。を。攻。む。と。亦。さ。小。の。機。が。う。尾。州。小。逃。さ。し。十。餘。日。漢。芳

野山嶺つて小系兵一戦不利と傳て後助遠く命をけしむ。夫より官軍方の殺伐と屠は
 小系を國中の相時能く守る所の鷹巢一城を破りける。諸軍令とて攻む時能く
 小千七誘ふ防戦と稱せざる。かくて義助勅を奉り四國中國を靡けんと欲し今張の浦に
 到る國守大佐左馬介氏明とて遂て城に入らば主肥後能く河田武市日吉等の官軍未だ
 未だ義助兵と云換てとてより賊城を屠らんとて固て攻む。小降る者十五壁を助大
 威を震ふ。あつるにこの年四月より義助重病小犯されて。紀居安とて心神苦む。大體に
 下の官軍大小受へ医務とて盡せしむ。更小の疾もあつて應二年五月とて小犯に
 病の爲に死せり。嗚呼惜む。この兄弟親家の爲に身を盡し心力で竭せしむ。その功を全う
 せむ。半途小で病小卒とて実小縁慮の故あらむ。時の然らむむるなり。

足利左馬頭義
 氏之男官内少輔
 氏之弟御

源家氏 尾張守
 從五位下

家宗 志波尾張守
 從五位下

高經 尾張守
 從五位下

源理太夫入道
 法名 通朝

足利高經

日帝貞治元年卒
 今安政三辰地 四百六十五年成

足利高經者尊氏之族也從軍有勇守北
 陸居越前黑丸城義貞屢攻不克而死於
 是高經功名尤著其後有故暫屬南方悔
 過歸仕義詮居執事職改名道朝其別號
 曰斯波世所謂武衛是也

高經室町家執事とて子とあり。その子長重左兵衛督相繼で
 管領とあり。世々將軍家補佐とて世々武衛と稱しけり。

足利高経の始

足利將軍尊氏一族あり。前小記より。所々の軍小幡氏小幡ひ戦功あり。前
 前の國軍九の城小幡ひ北國の押へる。延元元年十月。義貞太子恒良奉
 北國小幡ひと。城前金多の城小幡ひ。かくて將軍尊氏の命より。高経軍九の城
 万餘の兵と帥て金多の城を圍ひ。然るに義貞の勇士固く守つて。拔と能は
 顯精進より。引返して金多の城の後詰をせし。軍士散て十六路あり。時小栗
 生。縁針小幡ひと。系兵をける。機を察し。義貞城を去て。逃れけり。系兵
 討る。の多る。同て尊氏仁木頼重高経泰と。再び金多の城を圍ひ。必
 外。軍車服屋敷助。小幡ひ合せて。高経が勝敗武界の事。とも裁き。今あ
 言せ。小文和元年の夏。山名時氏の子。師氏出雲同備伯耆の兵と帥ひ。先
 八幡と長瀬和岡が。津敷を拂ふ。その功。淺くあらず。て。自ら。修り。佐
 木道春。八幡

出頭より。之小幡ひ。若狭國今積の莊。賜ら。と。道春が館へ。住ける。小幡
 并。と。師氏小幡ひ。元。無。後。ある。と。師氏大。小。幡。ひ。伯。耆。小。幡。ひ。父。時。氏。小
 之。を。告。時。氏。使。て。佐。木。入。道。春。の。功。小。幡。ひ。君。露。と。得。て。妻。家。と。願。ひ。む。後。あ。る。バ
 詮。方。あり。と。伊。豆。波。多。野。夫。村。小。幡。ひ。の。諸。士。と。共。小。幡。野。小。幡。ひ。で。若。衆。責。恩。免。あ。る。バ。四
 味。方。と。う。ん。と。南。市。大。小。幡。ひ。の。諸。方。の。官。軍。と。牒。し。合。て。不。意。に。起。つ。て。洛。を。攻。む
 之。の。時。氏。孫。金。多。在。る。義。経。の。勢。微。し。て。大。敵。を。防。ぎ。が。た。帝。奉。じ。て。無。井。の。沢
 不到。時。氏。師。氏。系。に。入。り。幾。わ。ど。な。く。本。國。小。幡。ひ。文。和。三。年。尊。氏。上。洛。仁。木。頼。重。と
 執。事。し。る。義。経。を。て。山。名。と。誓。む。時。氏。使。て。連。冬。と。迎。へ。主。將。と。あ。て。南。方。に。應。じ。連。に
 洛。を。攻。む。と。あ。の。時。城。前。より。足。利。高。経。越。中。の。桃。井。連。軍。と。共。氏。を。頼。む。と。あ。り。及
 小。幡。ひ。と。名。に。通。し。南。軍。に。屬。し。たり。か。て。時。氏。の。經。連。常。將。牒。し。合。て。京。洛。を。攻。む
 の。時。法。軍。義。経。小。幡。ひ。播。磨。へ。の。間。系。都。を。无。勢。なり。垂。冬。大。に。之。を。破。る。と。傳。て。そ

氏まで希て奉じて、武佐寺に逃る。連冬、軍時氏を經連者以下、小治に入。
 ほか、尊氏諸を攻んと、關東の兵で備へ。東坂本に陳をさる。義経播磨より引退し、神
 南の北小原を圍て、連冬、時氏高経等、東寺に屯して、ことごとく戦ひ、且和田楠平、於渡邊を我
 て南の尾崎、小原を所、細川頼之、赤松則祐、陳と戦ひ、武軍大敗をせり。則祐士卒を
 屠して、万死不入て、味方援ふ。時氏高経等、戦ひ疲れ、且軍糧小乏く、而て國に還をせり。
 高経、連冬、國小降り、我あつて、さても、思ふに、從來、且利の一族なり。今、南を以て、屬するを
 小念をり、大義を廢る。こと、人倫の道にあらんと、自ら悔て、使節を遣はし、そのことを信ぜける。
 小義、氏異議を許しけり。また、さる氏、不隨ひけり。また、さる二、代義、徐、將軍の世、おさむ、貞
 治元年、その子、義經、執るる、義將、幼年、る、せり、と、言、經、入、道、と、して、補け、滿、春、目、に、熾、る。
 佐々木道春、と、權、と、事、ひ、就、小、原、と、經、小、原、に、就、前、小、道、と、討、ひ、と、向、て、その、故、を、固、く、守、り。
 降らざる。と、數、月、小、治、に、び、五年、秋、七月、開、戦、の、うち、小、治、降、り、

足利隆興判官
 義康三男

源義季 細川一郎

賴直 細川公四郎

賴貞 月八郎二郎

顯氏 細川小四郎

從四位下陸奥守

定禪 親宮別當

宮内卿

細川定禪

卒年未詳 延元の後大功あり
 今安政三辰迄 五百二十一年 成

細川定禪者嘗以兵五百勝敵二萬雖寡不

當衆然有時而偶然乎其餘戰鬥猶有焉

後醍醐天皇北條氏の誘着て怒り、ひて天下に令を下し、護良親王を援け、新
 田足利楠平、諸公の官軍、競ひ起り、一時に鎌倉を滅し、天下一統のひけきと。
 賞罰正し、るるをり。赤松田心等の別おも、忽ち叛き、難はに及び、細川定禪
 も、讃州小治を、就に、系、汗、に、經、せ、ん、と、い、こ、と、より、尙、尊、氏、叛、き、大、軍、を、率、て、上、洛、
 せ、ん、と、い、四、海、の、朝、敵、蜂、の、下、に、官、軍、智、謀、武、勇、あ、り、と、い、こ、と、を、拒、げ、に、所、な、り。
 嗟、一、坪、の、に、穿、り、。技、桑、修、羅、の、術、と、な、り、

細川定禪の経

從四位下陸奥守細川顯氏の弟なり。少ありて髪を削り。後金若宮の別當と成
卿律師と稱す。相模次郎時行礼を伝ふ。小記あるとき。紹命を受けて。足利氏に
主を代するの刻定禪。浮屠の身あり。このども。別當として。深衣をぬぎ。この時即で
幸ひ。て兄顯氏と共。小足利。燕衣に從ひ。時行を替て。禪を託す。是より。後還俗
て。本國。後小居。伯。つ。その時。機を窺ひ。る。其氏系。師を犯さ。小及び。兵を起して。是
小應を。堅固の莊に。軍し。舟木頼重を敗つ。と。四國。備前。悉く。定禪。小應。下ける。
定禪。こより。威勢。張て。中國。小跋扈。せり。かくて。延元。元年。正月。の。後。其氏。の。大兵。上。帝
以。新田。兄弟。捕。下。と。して。所。に。防。ぐ。と。い。ども。官軍。竟に。利。申。す。と。主上。歡。心。に
避。る。この。時。火を。放。つ。て。内。裡。を。燒。き。其氏。遂に。洛。小。入。り。定禪。を。て。二井。小。居。ら
し。山門。を。窺。む。希。紹。て。後。貞。正。成。顯。家。の。諸。將。に。命。下。二井。小。在。所。の。定禪。で

撃。む。其。勢。於。て。六。万。餘。騎。なり。一。從。三。万。餘。騎。奔。軍。と。如。意。山。小。軍。一。後。貞。正。先。鋒。千
葉。大。飯。火。を。繼。つ。て。先。登。り。定禪。を。兵。五。万。死。小。入。り。こ。と。で。防。ぎ。難。ふ。小。入。り。千。葉。新。分。爲。幾
ひ。記。官軍。殆。潰。え。り。後。貞。正。十六。騎。果。生。條。像。畑。且。の。四。天王。皆。突。出。し。國。を。折。り。門
を。破。る。こ。小。放。て。定禪。が。兵。防。ぎ。兼。て。援。礼。主。官軍。勝。に。あ。て。城。小。入。は。山。院。如。意。山。より。突
撃。に。り。賊。軍。大。小。獲。損。し。深。谷。小。漏。つ。と。後。死。さ。る。り。の。數。千。萬。官軍。首。を。獲。る。と。七。千。餘
級。定禪。頗。に。敗。を。し。て。も。是。と。構。新。は。尊。氏。定禪。を。援。け。る。爲。に。三。條。河。原。に。出。ける。と。き。其
負。城。を。逐。て。あ。小。出。る。氏。兵。を。進。め。戦。を。鳴。し。翼。を。張。て。と。ま。し。戦。ふ。後。貞。正。精。銳。二。千。を。置
こ。五。十。と。隊。と。なり。敵。小。紛。は。て。その。軍。中。に。伏。し。め。ける。が。機。を。量。て。相。當。を。と。る。と。伏。兵。奔。り。く
後。小。記。は。其。氏。強。き。以。爲。我。軍。敵。に。應。じ。ぬ。と。大。小。潰。え。て。只。當。面。は。後。貞。正。と。と。逐。る
と。急。なり。其。氏。丹。波。に。奔。り。梅。津。に。到。り。其。馬。竟。小。斃。と。り。因。て。劍。を。拔。き。自殺。せ。ん
と。都。筑。某。馬。より。下。り。其。氏。小。援。け。を。ら。し。む。脱。に。日。暮。て。後。貞。正。の。兵。を。呼。び。洛。小。憩。ふ

賊軍
如意山
深谷
墮
没
圖



赤松則祐の跡

赤松則祐の跡。其の善く治まらざる。悪くも治まらざる。其の宜きもの。赤松則祐始めて大塔宮小従ひて王室恢復の功をなさんと心て朝廷に傾くと死。その志貳あり。以て宮南都小たきて脱と主従山伏の貌に打扮紀の語を潜行する時。及び芋嶽莊司官の爲に關と居て。其を拒。近居の中。一兩人の首を斬て賜はる。然らば若の璽章を賜はる。さうば通ひまら。との則祐。若然らば我首を授け。之と躬太刀を授て切んと。を平賀。之。其を止め。自らの清旗を教ふ。とて難く通り。ひひ。の護良親王の。傳に載る。夫より後。父圓心を語る。播磨に義兵を揚。六波羅へ攻入る。及び桂川の。隔る水に馬をち入。して渡。る。勇猛絶倫。性昔の佐々木。梶原。右に。出。遠の圓心が。傳に載る。夫より系。師小攻。入。て。大。小。教。を。敗。り。け。し。と。寡。の。衆。に。教。を。さ。る。べ。し。赤松が。勢。勢。馬。の。武。老。に。蒐。ま。ら。し。て。散。れ。は。ま。下。流。前。守。貞。範。と。律。師。則。祐。に。桂。川。を。渡。

赤松則祐の跡。其の善く治まらざる。悪くも治まらざる。其の宜きもの。赤松則祐始めて大塔宮小従ひて王室恢復の功をなさんと心て朝廷に傾くと死。その志貳あり。以て宮南都小たきて脱と主従山伏の貌に打扮紀の語を潜行する時。及び芋嶽莊司官の爲に關と居て。其を拒。近居の中。一兩人の首を斬て賜はる。然らば若の璽章を賜はる。さうば通ひまら。との則祐。若然らば我首を授け。之と躬太刀を授て切んと。を平賀。之。其を止め。自らの清旗を教ふ。とて難く通り。ひひ。の護良親王の。傳に載る。夫より後。父圓心を語る。播磨に義兵を揚。六波羅へ攻入る。及び桂川の。隔る水に馬をち入。して渡。る。勇猛絶倫。性昔の佐々木。梶原。右に。出。遠の圓心が。傳に載る。夫より系。師小攻。入。て。大。小。教。を。敗。り。け。し。と。寡。の。衆。に。教。を。さ。る。べ。し。赤松が。勢。勢。馬。の。武。老。に。蒐。ま。ら。し。て。散。れ。は。ま。下。流。前。守。貞。範。と。律。師。則。祐。に。桂。川。を。渡。り。六。條。河。原。へ。涉。と。進。出。て。味。方。を。待。六。波。羅。へ。打。入。れ。し。と。も。この時。東。寺。より。参。つ。味。方。敗。れ。ぬ。と。覺。し。て。教。より。他。の。老。い。ふ。が。ち。て。の。中。相。違。せ。り。と。主。従。六。波。羅。中。奈。何。と。も。經。方。の。け。し。と。教。小。紛。し。て。退。入。と。な。り。身。を。引。引。難。所。小。扣。へ。し。と。も。同。田。宮。橋。を。さ。し。と。赤。松。が。勢。味。方。の。中。に。紛。し。と。り。と。参。り。あ。る。七。集。等。の。川。を。渡。し。來。て。馬。物。具。の。濡。て。あ。る。人。を。と。り。て。經。に。付。と。る。と。と。大。声。小。呼。り。つ。て。進。ま。と。と。進。と。し。捲。く。貞。範。則。祐。主。従。六。波。羅。馬。と。双。て。こ。小。朝。ま。に。彼。處。に。匿。ま。て。教。を。待。六。波。羅。勢。の。か。ま。ふ。小。勢。と。の。あ。ひ。ひ。り。と。も。同。士。討。を。す。る。者。さ。あ。り。則。祐。味。方。で。省。ま。る。の。つ。負。範。小。の。引。別。士。卒。と。参。討。ま。て。や。と。一。勢。と。の。あ。ひ。ひ。り。と。も。さ。う。と。と。大。宮。で。下。り。に。馬。と。進。て。落。け。る。所。小。印。具。尾。張。の。が。那。等。八。勢。混。と。と。進。ま。て。何。方。進。と。落。ら。る。誰。人。の。や。名。ま。る。と。と。左。右。の。の。勢。で。も。か。ら。む。則。祐。首。を。回。と。人。教。あ。う。ね。ば。者。の。さ。る。も。經。ま。し。と。首。を。取。て。人。小。ん。せ。と。と。と。と。才。構。へ。と。進。て。あ。け。ば。教。も。猶。進。來。る。に。懸。て。



赤松則祐



則祐

豪邁

騎

桂川

七

西八條ある寺の前南の方より出けし、兄の伝濃守範資が二百餘騎を屯しつ、羅生門
の前より水の隈、小馬の足と冷し、てり夫をみるより、則祐の諸親を合せ、御と進み、是
より八條の兵、佐のよき教、中在りの、惜きとてげり。と、吐きあがり、引返しとて、則
祐と一騎、味方に難し、教の八騎、小羽をうけらる、落行途で慕ひ、せけれど、少くも、脱せる氣
なき。この所、志馬と、這来つとる、膽太き。と、破入を、搦しとる。かくて、建武の擾亂以後
の、則祐、足利家に、隨從して、戦力と、竭しける。文和四年、未正月、山名時氏は、より、爲官軍
に、屬し、足利連冬を、主と、とて、上洛し、尊氏兵の、寡きなり。事と、奉じて、いかに、る。時
氏、當經、利直、常井、等、相、俱に、洛へ、入る。同き、三月、子氏、後、詮、兵と、合し、て、東に、攻む。時、小、捕、和
國の、諸將、吉、良、石、堂、山、名、桃、井、小、幡、渡、浪、の、勇、將、等。また、四條、中、刺、を、隆、俊、を、の、爲、の、士。
渡、鳥、羽、赤、井。また、八幡の、山下に、陳、も、て、武、軍、と、大、小、挫、ぐ。時、氏、大、小、奮、戦、し、て、後、詮、が、軍
殆、危し。赤、松、則、祐、佐、木、道、春、僅、に、百、騎、可、し、と、潰、を、援、け、止、まり、残、る、則、祐、左、右、で

顔て、天下の大事、この舉、あり。何ぞ、戦、死、し、て、若、名、と、後、世、に、注、め、ざる。と、自、身、を、執、て、勝
誇、つ、る。敵、の、中、で、地、廻、り、縱、横、に、蒐、る。從、ふ、兵、士、則、祐、が、勇、氣、に、憤、ひ、死、を、決、
め、戦、ふ、と、い、う。得、の、當、軍、大、小、札、と、討、つ、る。の、若、子、に、て、時、氏、も、ま、創、を、被、る。赤、松、が、兵
勇、氣、と、倍、し、面、も、揮、む。突、戦、し、て、時、氏、殆、危、なり。と、其、后、河、村、彈、正、も、若、名、を、防、て、討、死、
す。この、同、小、時、氏、は、た、き、と、脱、け、り。こ、ま、より、南、軍、利、を、失、ひ、坂、本、に、引、還、き。夫、より、統
て、攻、撃、せ、る。不、緒、お、も、國、小、降、り、將、軍、洛、へ、入、る。こ、ま、と、偏、小、則、祐、が、小、勢、と、以、て、喘、止、り。
万、死、に、入、て、戦、ひ、し、り。敗、軍、還、て、勝、利、と、る。こ、ま、則、祐、が、勲、功、あり。是、より、後、詮、詮、軍
の、活、世、康、安、元、年、冬、十、月、細、川、清、氏、の、二、子、と、て、石、清、水、の、八、幡、小、幡、で、社、前、に、於、て、元、服、す。
兄、を、八、幡、六、郎、と、号、し、弟、を、八、幡、八、郎、と、号、す。後、詮、と、ま、で、憤、り。その、本、意、を、曉、ひ、し、依、本、
道、義、の、時、を、幸、ひ、と、と、終、り、け、し、と、後、詮、と、ま、で、殺、さ、し、と、清、氏、は、大、小、怖、れ、洛、を、去、
て、南、方、に、歸、し、楠、正、儀、と、合、し、て、急、に、洛、を、責、け、し、と、義、詮、防、ぐ、と、能、は、ず。事、と、奉、り、

ていふ小退く。十時後滿四歳を洛小養子のみ一と則祐乳母に懷せて東山小忍びをこ
 うして播磨白旗の故小清侍。その翌年奉放り。飯洛の養を計らひ。その足利家
 三代將軍なる大功ありて是より後評定衆とあり。その人の誰ぞ。その名伊豆守時氏
 赤松律師則祐一を左系大夫詮範依と本六角判官入道崇永の四人なり
 按るに律師則祐父と共に朝敵小叛き。武將小黨して後志を改め。足利
 氏の為小患我を盡し。尊氏薨下の後の後。猶忠節の義と失つて。其子と申す孫
 満祐に至り。將軍派の事ありて憤り。怨を匿て。牙に靖と。其子と申す孫
 領主小出奔。以て。名持豊を。び。執。りて。こ。こ。と。を。解。む。満祐防。禦。の。術。つ。て
 て。竟。小。白。旗。の。城。小。自。盡。せ。り。その。起。原。は。祐。が。領。地。を。割。り。て。伊。豆。守。貞。村。小。養
 人とするに因る。祖父とのみ孫とのみ領地小因て君に冠に我國とのひろ。の。と。後
 播きとあり。ひろ

足利義満
 男桃井遠江守義龍
 四代同六郎貞頼男

源直常
 桃井播磨守
 從五位下

直和
 桃井中務少輔

實直常孫
 直弘 同二郎

桃井直常

人皇五代 後光嚴帝貞治五年卒
 全安政三辰迄 四百廿二年成

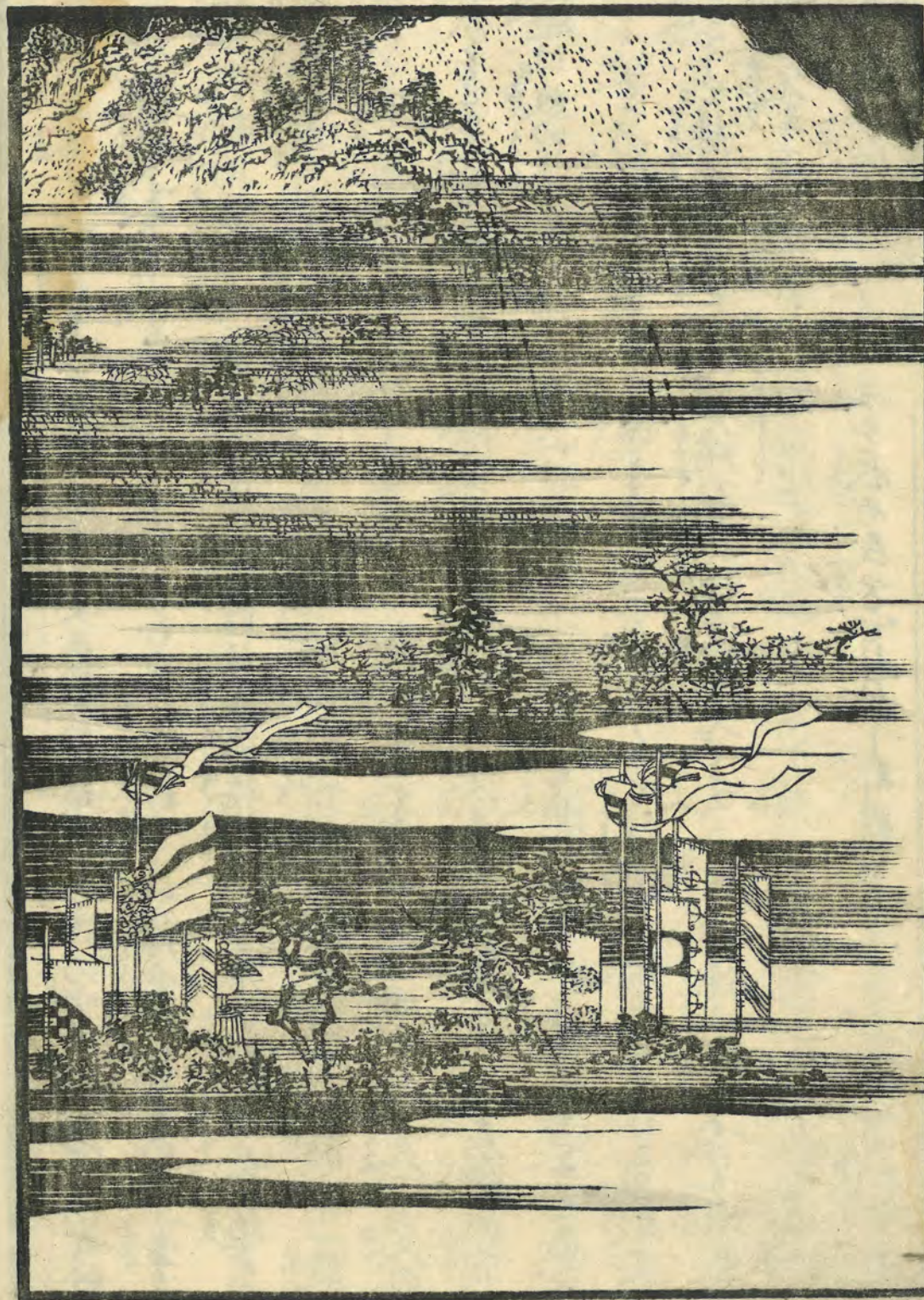
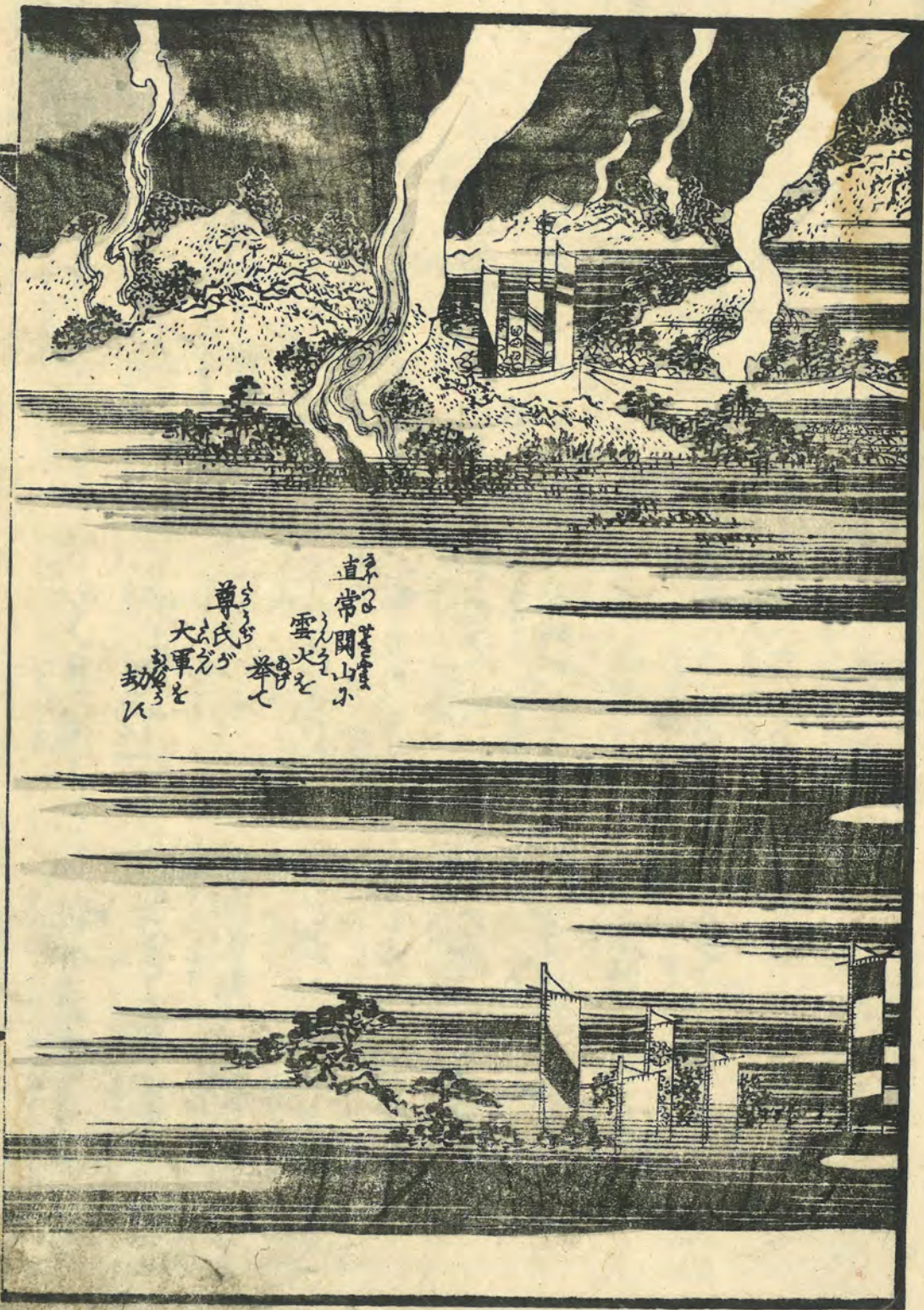
桃井直常者尊氏之族也曾師楠正成學
 兵法建武之乱屢立戰功既而屬南朝或
 進攻京師以破義詮或退據越中而守城
 壘凡所到顯其名

人物掌鑑を按るに桃井直常は足利義康の裔なり。高祖父義胤始り上野桃
 井氏なり。其子とての氏名を桃井とひる孫因て氏とふひと見えたり

挑井直常の結

書にのち名越時義北國を義兵と奉加及大聖寺にち出さるの時並常大
とて方便を以て討平ぐ。とより良將の成えありと云
按るに當時越中の守護に系國ふのち名越遠江守時有て元弘三年五月
十七日越中二郡を討死とあるその弟名越修理亮有公も兄と討死と録
せり。その先北條は向小四郎義時二男名越成於承和時より出たり。蓋時を
の者三人あり人の名越の氏族遠江五郎左近大夫が監しとてえて成於承和時の末
弟今入陸奥赤橋常盤は同等の組北條後河守重時四男陸奥七郎業
時の子にて從五位下尾張守時兼小侍所の別當正安三年六月六日薨とあり
と見え且つ時代大不相同せり。一書の説の時業の傳寫の誤ありと云
直常成功ありより尊氏も重く用ゐる義詮孫念ふ在のときとてを守護して在るが

建武四年冬十二月北畠中納言頭家興及の兵と卒。芳野の宮に臻ると義詮
在鎌倉のお小令とてと利根川に防がむるに大敗せしと鎌倉に帰る。この時小
と及ぶ新田義興兵と奉て頭家に合體し頭家倍極威を震ひ脱小鎌倉に迫ふ
及び挑井斯波高上杉等始くその親を遊後目と計つて死せしと義詮時小十二歳
我苟くも大樹の子とて敵の強きとてて我ふ及ぶと進んて天下の人の
笑ひをくらふ如く愛せ敵を防ぎ運場を戦死せし義幸ひに脱さるる房總の向
小逃げ敵の後より上洛し衆兵連ひ戦ふ及び我軍捷とてとて録バ勝ざるにあり
と云ふ。この一言に励まされ衆とてとてを然りとて防衛の備をかりける。衆寡
併せし鎌倉の軍大潰れ諸將を推して走り頭家鎌倉に入ふけり。有る
暦應元年正月頭家義興上洛とある。その兵五十萬と稱ふ旌旗千里に翻り。その威
勢遠近に振ふ。行海道の衆を収め民等と抄録し郡縣とてとてとて小退服し社堂是



陳以のり畠山門波お監十侍誘を引て南方に降つ桃井連常頼中より誘て惠
源を援けて南方に属さぬ山小堂のて雄中を窺ふ経戦人と欲す直に其の
寡きを以て東洛を還く時小桂川にて尊氏と西より帰る小逢ふ其時喜以尊
氏と其を合して隊伍を分ち洛外所々に軍以桃井連常ととて自より七千餘騎を
率て東山を背に腹小賀茂川をきて教を待ち仁木細川が二万騎小遣ふ連常應
戦良久をりて教を討て數百人をとり猛威を奮ひ聞ふ時小佐と木入通達其
山の南より連常が後小出づ直常が兵勢き濃由桃井大いりて勇氣を励めし
前後の敵ふあると教回八幡の援兵ももて臻らば連常大に戦ひ疲れ東山に
上りしを以て小不すと尊氏の兵二條を東に出で帰洛を絶つ直常教をこ方小
受け防戦すると独りさまで日未の勇猛を彰して秀未の教をうち拂ひ難倒して
まると出陣し小陳一騎を列社と小天の明とを候尊氏も軍を繰め城内の侍を誘ん

とてとて候ども曾て臻らむ多く桃井が勇勢をえて惠源が方に屬しけり
尊氏父子戦力で失ひ尊氏以西國に義経の丹波小命する夫より復敗軍し某所寺
公義が防戦小周で湖松岡の城入と結兵落散て力なり尊氏總家庭を便として惠
源と和談ふさんと請ふ惠源とと肯ふより已に洛に入るを以て仁木細川土は
佐木等が黨とて尊氏小仕て惠源を憐むまに上杉石堂桃井尊氏と味と惠源小
属まに威功を争ひて是より復兄才不和あり惠源雅の至らんと忍と系と出で戦
前小命は尊氏誘をて是を撃つ惠源然と鎌倉に通る尊氏躬軍と師ひ後及
薩埵山に至る惠源大兵と以て圍むといども竟小敗をて尊氏小降つと夫より源
倉に伴ひて鳩殺せしむそそ小死の軍敗して桃井連常頼中へ還きしが文和二年
山名時氏系師と攻んとする時小南方に屬しつその事既に前より
かて後貞治元年是利直冬主とて山名時氏伯耆より起り美作小赴き吉備の二兵

其の石見の諸城を降し中より敗走せり然るに官下野入道一人是を拒むに至る軍不克に
 起るを直を放し本國へ歸りしなり。この時連常佐濃小記の直冬に應じんと以加勢能也
 越前の兵とて拒ぐ直常例の極威を震つて三州の兵と戦ひ勝つて敵を討たれり
 加能の降人等連常がら計を計て火を放てしとて勢ふ直常大に機機し。通して井はの
 城に入る。ふ放て中國北に奔る敗走して官軍微くする。然るに斯波道朝越前に死
 し。その子義將降来しといふも耻て東洛へ至らざる。其後經將軍義將不桃井退罰の
 工を命じ義將則軍と云。桃井直常と戦ふといふ連常防戦の力竭れ松金の城小勢は
 幾るる病を發し終に松金の城小勢は義將機を得て國内を畧し北及び多々義將に
 屬し官軍賞して越中の守護とふいと傳へり
 附ての足利家の統將武家の南方に降り復武家に服し連常一旦武家の小叛き後
 その志を更ひ依の統將よりとて入る。勝る。遠く。の。

山名時氏

辛未未祥貞和三年因伯西丹作の五箇國を領す
 今安政三展造 五百十年成

ヤマナ トキウヂ ハ タカ ウチ ノ シヤウナリ シヨクノグシコウマ スカカラ
 山名時氏者尊氏之將也處々軍功不少
 イツタゾラン ナンハウニト アシカ シ アヒ タカウリ アリ トシ ソノ
 一旦屬南方與足利氏相戰者有年其
 ノチマタサツケクシグナ ナル ブ ニート
 後又去官軍為武臣

新田次助義重
 二勇山名冠者義範
 六代
 源政氏 山名小二郎
 時氏 伊豆守
 後五位下
 淡名通靜
 師氏 右衛門
 義理 代理大夫
 紀伊國守護
 氏冬 中務大輔
 早世
 氏清 陸奥守
 以下畧ス

按るに足利家の世はつとて後家祿及び由緒を以てその職を定りし山名細川下屋
 一色富山能登佐々木極の五家を所相伴衆といふ。この將軍家諸侯入所の時
 所先へ参り向ひ所座に服従し進退に隨ふがまは股肱羽翼の居る。彼門下
 する格別。ふ。

利家の氏族にて最一誘き千の勇将あり。脱小正行千劍破に起るとき細川顕氏
 と共小正行を防ぎ其軍勝利ありとていふ。この正行が必死の威勢ありなり。こ
 てふとて防禦の拙きといふ。然るにこの後將軍に叛き。その子師氏と諸共に南
 朝小正行を所稱し脱小斯波高経が小傳小裁て前に記せば。今こふ教賢言をて蓋利
 家の諸將における勳をいふ。勳功に誇り。或ひは君親小憑據て驕奢を究め人を侮は
 多くその風習にて高師直兄弟を妬め土は頼遠細川清氏仁木義長などとも其
 類あり。佐々木道春も權に誇り。山名師氏がときを懼れ。因て怒りて南方に去り。
 素朴小冠をふくみ不至たり。之小周て是をうけ。終始心を憂ぐるの癖あり。或ひは屬或ひ
 離る。との及復二あり。然れどもこの國家を保ち幕府を固きものと。智謀軍略
 他小勝まざる。まは洪福といひべし。かくて時氏南朝小降て功を顯して極威を達し康安元

未辛丑秋七月。獨子右衛門佐師氏等と出雲伯耆國幡の兵二千餘誘て作入る。
 赤松の守護赤松世貞。筑前播州不在てこと不應ト急小接戦する。然るに小放て同
 野妙見の三城を攻てこと降し。勝にまぐり念慮を攻む。この城の赤松の麾下佐用美濃
 貞久と有元和泉守佐久守より最固く守つて降らば然れども糧乏を以て久く保てず
 小放てこの城に世貞及び弟則祐兵と營へ二千餘を率てことと救ふ。小肥前入道信禪
 然に南朝に助力して時氏が兵と援け長九郎左門内。また時氏を救ふ。世貞則祐
 援敵を前後小請て挑む。兵と引て播磨に帰る。小放て念慮落城し時氏信兵威を展
 ふの時小放て西玉の栗池武光及び新田の一族肥後小起つて近國を驚け小貳大友等と
 戦ひことと敗る。武威を四境小震ひけ。天下を動亂せり。貞治元年夏四月。時氏臣利連
 冬とねとて。復美作に出張し。この子師氏をねとて。備前備中の兩州小遣り。富田重貞

是を備後へ遣ひ左兵衛佐直冬を召見に奉つて富田小舎に吉備之國の諸城を授け
 直冬は應ぜざるに宮下野入道のとむて直冬使者を五國中に召し官軍に属する人
 に教き孤軍を守つて降らざるに。その詮とある所書や早く降るべしと謂ふも入道これ
 對て曰く直冬棄らざる憑藉の比を我を頼る國とも我軍從ふの時小舎を轄下に
 降る武夫の本意に非ずと婦子三郎氏信小五郎誘て副て不意に襲ふ。直冬迷ひ難
 く直冬軍もまた散れ直冬直冬散卒を集め戦ふとする小舎能く兵を引
 て降る。是より後時氏父子功を顯はさん難きを曉る終小舎軍に降る
 按る小舎より筒井直事越中に記る山名父子伯耆に記る直冬直冬中國小兵
 を率ふるものとども。この戦ひ利を失ひ貞治二年大内氏仁木長武に降る南
 朝軍威日に減る時氏功のあらざるを怨つて前日の衆を討ち殺す。後詮軍に降るけり
 因て後詮周幡伯耆丹波子後美作の五箇國の守護とせり

新田義興

人皇五九代 後光嚴帝 延文三年十月卒
 今安政三辰追 四百九十九年成

新田義興者義貞次男也曾帥師入鎌倉

破義詮又進到京師守八幡既而歸東州

正平年中起兵與尊氏相戰再陷鎌倉人

服其勇其後被竹澤氏誘膠舟而沒

按るに義興北國以来の武功實に父兄に耻びしものなり。南朝衰勢の時小舎を
 行ひて兵卒星らに。まて奈何ともするてを。終つて志を遂げ。二とて是利
 氏の諸所に較ぶるに勝るといふことなり

源氏 新田義興
 左兵衛督兼播磨守正四位上
 義貞 越後守 從五位下
 義興 左兵衛佐 正四位下
 武藏守 左少將

10

建武四年冬十二月北畠顯家奥州の兵を率て上洛し、その時鎌倉の諸將利根川に
て防ぎて敗退く。顯家尋で鎌倉に入ると、以新田義興上野に居る。この時で
つて時至りねと國中の兵二方に督し、顯家が威を振く。号を以て關東の兵旆を
荷ひ、戈を杖て来り、屬するもの雲霞のごとく。是より直に鎌倉を迫る。陰防ぎ、我
ふと能く逃亡するに因て、鎌倉に入らぬ。その翌、曆應元年正月、顯家義興、鎌倉でお
立連、不芳野へ向ふの時、美濃の國青野が系あて、土返、桃井等と闘戦し、是をも敗
て上洛し、尊氏將と諸將を令し、以美濃の畠山世不違、顯家跡を枉て、憂れに至り。桃
井連常高と接戦し、大に敗れて遁走する。この時、顯家の弟顯信、新田義興、散卒を
聚め、八幡の城に擁護する高師連とて、圍を拔んとす。是と義興等固く守りて、援を能
く以顯家とて救えり。是より大に敗れし。安倍野に戦死するに及び、八幡に力て美

天竺を破る。義助、服を乞ふ。義助、敷賀不到。八幡に大の龍を奉
 ぐ。名城を落す。と途より、八幡の城、烟の中に克く。教を授け、終に、この
 時敗る。は、然ととも、糧を盡す。外、小援の兵、至らば、力竭て、義興、顯信、夜、小乗、て、城を
 落けり。遠の、一件、の、頭、取、及び、長年、義助、の、小傳、小姓、を、見、え、え、と、言、ふ、と、小大、累、に、於、て、義興、の、二男、
 義宗、の、男、義治、を、助、の、時、に、俟、て、武藏、上野、越後、信濃、の、間、に、あり、然、る、に、今、歲、文和、二年、
 正徳、顯赫、系、落、を、攻、て、後、詮、没、落、に、及、び、一、族、及び、交、結、の、衆、八、百、人、を、催、あ、て、西、上、野、小
 旗、を、奉、ぐ、こ、と、に、於、て、關、九、の、兵、招、き、に、集、る、と、義軍、に、應、じ、る、者、十、万、誘、進、ん、で、武藏、野
 小軍、に、尊氏、に、於、て、大、小、警、き、鎌、倉、の、兵、數、万、を、率、て、こ、と、に、還、ひ、戦、ひ、ん、と、い、新、田、の、お、二、所、に、あり、
 尊氏、が、先、鋒、鎌、倉、庭、命、鶴、こ、と、に、對、し、戦、ふ、處、に、一、戦、小、敗、と、れ、れ、相、蹂、躪、あ、て、引、退、く、尊
 氏、二、陳、を、入、更、ら、せ、ん、と、指、揮、あ、せ、ど、前、軍、の、礼、と、引、く、に、隔、ら、し、後、軍、敢、て、進、ま、く、新
 田、義、宗、諸、軍、に、先、ぎ、ち、天、下、の、為、に、朝、敵、あ、る、我、が、為、に、父、の、讐、な、り、今、日、尊、氏、が、首、を



義興
欺く
竹澤を
信を

新田



揮きて箇頃時を下て然る勇銳比ひあきまじも衆寡の兵力相對さば一戦不利と
あひ許を敵て散れり。尊氏とて逃れんと欲せども。鎌倉に大敵あり。まづこゝを攻
に如くし。小鎌倉へ推す。義興を佐僅八千。死を鎌倉小交せんとし。初め敵
侯。松田川村の一族。この戦に死する兵とて。十萬の衆にまゐり。鎌倉に似たり。ま
敵の銳氣を避る。敵の意を窺ひて。敵後信濃の兵と促し。戦ひあひ。然るに。面を
冒し。練めけし。雨のときを然り。石堂小保。二階堂。草名。之浦の輩。と共に鎌倉と
きて相換の玉。河村の里。小入。尊氏。戦ひ。勝と。いども。敵猶遠く。逃る。兵。不意の
あ。人を。鎌倉に。兵。備へ。然る。小義興。義治。の。再。び。うち。出。る。力。な。り。初。て。空。く。あ。ん
や。いと。父。和。二。年。と。て。ま。う。と。越。後。小。陣。と。て。城。郭。を。築。き。義。興。義。宗。義。治。の。三。將。と。小。據
て。便宜。を。窺。ひ。脱。小。文。安。三。年。と。なり。ね。然。る。小。武。義。上。野。の。輩。後。兵。と。率。人。と。を。勸。む
義。興。大。に。歎。び。て。所。從。百。餘。人。を。率。ひ。密。に。武。藏。國。に。到。る。こ。小。新。田。小。好。と。あり。ま。う。こ。由

山道誓に恨みあるの故に。その義興。小鎌倉とす。あそ。再び。威勢。馬。小。萌。せ。り。この。と。早。く
由。義。興。と。て。鎌。倉。に。攻。め。し。う。道。誓。大。に。泣。き。て。一。計。を。案。じ。出。し。その。竹。澤。澤。監。物。と。は
足。下。佐。年。義。興。小。鎌。倉。一。層。戦。功。あり。し。と。す。今。我。小。鎌。倉。と。い。ふ。と。も。義。興。か。ら。う。足
下。と。捨。れ。渠。を。誘。き。殺。さ。る。足。下。の。他。小。あ。ん。と。い。ふ。義。興。と。を。因。り。謀。せ。る。厚。く。こ。を
賞。せ。んと。し。竹。沢。頼。頼。に。頼。頼。と。と。し。う。詐。す。小。罪。を。犯。し。道。誓。の。怒。り。小。觸。れ。て。所
領。を。没。収。し。鎌。倉。を。逃。放。る。竹。澤。鎌。倉。を。出。て。武。藏。に。到。り。義。興。小。交。せ。て。い。ふ。在
下。聊。の。還。あ。る。道。誓。怒。り。と。非。道。に。辜。に。在。下。深。く。と。て。恨。む。こ。り。奮。怒。を。忘。れ。ぬ。六
ま。い。在。下。ま。こ。を。保。護。し。公。の。命。に。代。つ。て。前。日。の。罪。を。贖。え。と。ま。じ。け。り。義。興。始。め。い
義。興。と。い。ふ。中。さ。う。に。り。新。せ。ば。然。る。に。竹。澤。と。い。ふ。う。て。朝。暮。老。實。に。義。興。小。仕。へ。或。時
い。美。酒。佳。穀。を。献。じ。ま。う。或。と。ま。う。美。女。を。進。め。他。事。も。あ。げ。小。仕。ふ。る。と。稍。半。歳。修。り
に。あ。り。ね。と。小。放。て。義。興。由。所。に。心。を。死。し。て。始。め。の。う。く。疑。り。を。こ。小。放。て。竹。澤。の。謀。計

成就今孫金の畠山道誓四方に敵のあつて武備不怠と自らに耽る。その時
 公兵を記さば一挙に之を敗つ。公孫金へ入る。少く武義相模及び上野の兵招
 くるに未だ一頼く我兵を奉る人と勸む義興とを然りと。頼入延文二年十月武義
 をきて同なる。矢にの渡に到る時竹澤津で船底に穴を穿ち栓をきき。河中に至る及び
 舟子と討つとを拒く。水忽地小漲。入て我興主従大少潰く。于時竹澤津に同下野守之
 百餘騎西岸小備へてを射る。船中奈何ともまるとなり。從兵井澤忠大島周防守世
 良田石馬今由良兵衛今為相共小自殺。船即倫没せり。後我興少死を索め首を斬
 て竹澤津に孫金小獲送せり。道誓二人が功を賞し。かくて河氏莊所小住んと。矢にの渡
 上に来るとき迅雷疾風波急なり。大少悉く上流小向ふ。その時義興甲冑を著。白馬
 に跨りて雲中に現はる。以て射るとする。旗きて馬より墜七日にて遂に死に。その後種々の
 怪異あり。但人為に祠を建て。新田明神と崇め祀る。今猶その社顕然なり。

藤原姓 菊池

武時 菊池入道

探題英時ト戦ヒ
言死ス

武重 肥後守

武光 肥後守

武政 肥後守

菊池武光

卒年未詳

菊池武光者姓藤氏西州之勇將也

父武重之志能輪勤王之忠拉少貳摧

大友劇宗像掠島津九州望風而畏靡

元弘三年菊池武時入道寂阿義小堀て兵を起し。先々太宰少監則薩肥後の菊池
 郡を揚る。孫封を襲ふ。世勇名あり。武時義兵を起し。九州の探題北條英時を攻ん
 とて出陣の時に及び操田の祠を過る。馬蹶し。之を勸む。時に武時大に怒り。今王室の
 為小兵を出ひ。然るに馬を狂むる。こと極て非神あり。と鎬矢を抜て祠を射。馬聲
 大進む。之を果して。社前に蛇の死するあり。とぞ

菊池武光の節

武光が祖父武時たけときの脱に探題英時えいときと戦ひて軍利あり。以て竟に討死せし。その子武重志たけしげは
絶で戦勢を張る。或は其の義貞に従ひ箱根竹下はこね たけしたに尊氏を討ち。其の戦ひあり。以
て諸將と俱に降洛あり。かくてその子武光の世におび。猶志を改め。王室反復を圖
らんとす。と。南朝日々に威權衰へ。衆人僉武光が私に威を張ると。人心反復敢て一
致せん。こふ故て芳野殿へ使者を進らせ。奏して曰く。筑紫二鴻の朝敵ハ大方攻魔ハ
といふ。大鴻の坐さる。故動もよまば。反復して人心に服する。とは。頼朝の關西親王
早く山下向あり。官軍に力を副へ。賞罰嚴重に正し。西海道王威に順き。諸敵
退散して。靜謐致さんと必せり。と。こゝまでの軍事悉く奏聞に及びけり。南朝大
小称善あり。則先帝第六の皇子良懷親王を筑紫に下し。征西將軍と爲す。奉は
按るに。諸書異同あり。良懷親王征西將軍として。肥後に遷へ奉は。延文二年

ありといふ。後太平記ハ。南朝の元徳二年芳野の皇居を出ひて。播磨西下向あり
といふ。又思ふ。元徳との二年より。元徳の建徳の御年なり。延文二年ハ。南朝の正平十
二年に當り。建徳ハ。應安二年に當り。但南朝の建徳二年ハ。菊池武光の討ひて
良懷親王。明玉へ使を遣ひ。入えり。國史畧の細書にも。皇明通記ハ。曰く。大
祖洪武四年九月。日本國王良懷遣使朝貢と云えり。と。奉らる。こふ
要ふ。きと。あ。異同を奉て。便覽に備ふ

かくて武光が威勢ハ。虎に類を副る。と。探題一色重氏及び才範光
を。攻傾う。兩人敗れ。洛に降る。將軍家相強して。細川能氏をこま。不代り。一。鑑
西に赴く。勢に能氏途中。病卒せり。この時新田の氏族及び南朝に共するの兵多く
降て。武光に當り。武光い。威を張て。山を越え。嶺を渡り。日向ふ。入て。田山民少補が
影る。処の二侯の城を攻む。畠山防ぎ。難て。深山に遁し。奔る。大友利村大輔氏時。後を

武光
良懷親王
迎へ
西征將軍
と



百將傳
又
結卷
下

○世四

群
玉堂
歲
辰

以暇を以て年月を以て其の多しを都に費す。かくて武光も病卒。その子武敏
 家跡を嗣で武威を法と父祖に劣らざるに義満將軍の世に及び應安七年甲寅
 將軍躬九州を征せんと細川頼之を都督とす。その勢總て二十万達流雲に
 既にその年秋九月將軍家兵を進め兼池武教と高良山に戦ふ兼池武勢を
 損之が首に應ト竟に和好す。

按るに兼池寂阿より四世志を固う。武威を滅せし西州に跋扈。南朝の恢
 復を圖は固て良懷親王を迎へ西及の主のとす。其の良懷固より恢復に心あり。武
 光没し武教に至り。いづ 南朝の衰弊小なり。竟に將軍家に降るといふも
 肥前肥後流法を有て勇武の修練の志を盡し蓋良懷恢復に心ありと察す。い
 中務卿宗良親王が寄る所の和歌一首新葉集に載る。八月小文ての月と云ふ
 以て其の世のときを告げき哉とあり。是を以て後へする。

楠家系上三見立

正成 河内判官

正行 右衛門督

正儀 左衛門佐

正勝 左衛門佐

正元 小次郎

楠正儀

人皇二百代 後圓融帝康暦三年卒
 今安政三辰迄 四百七十七年 成

楠正儀者正行弟也守父兄業候 吉野宮

保護不懈屢覲京師破敵軍其後義詮及

畠山道誓率大軍來攻之正儀防戦有日

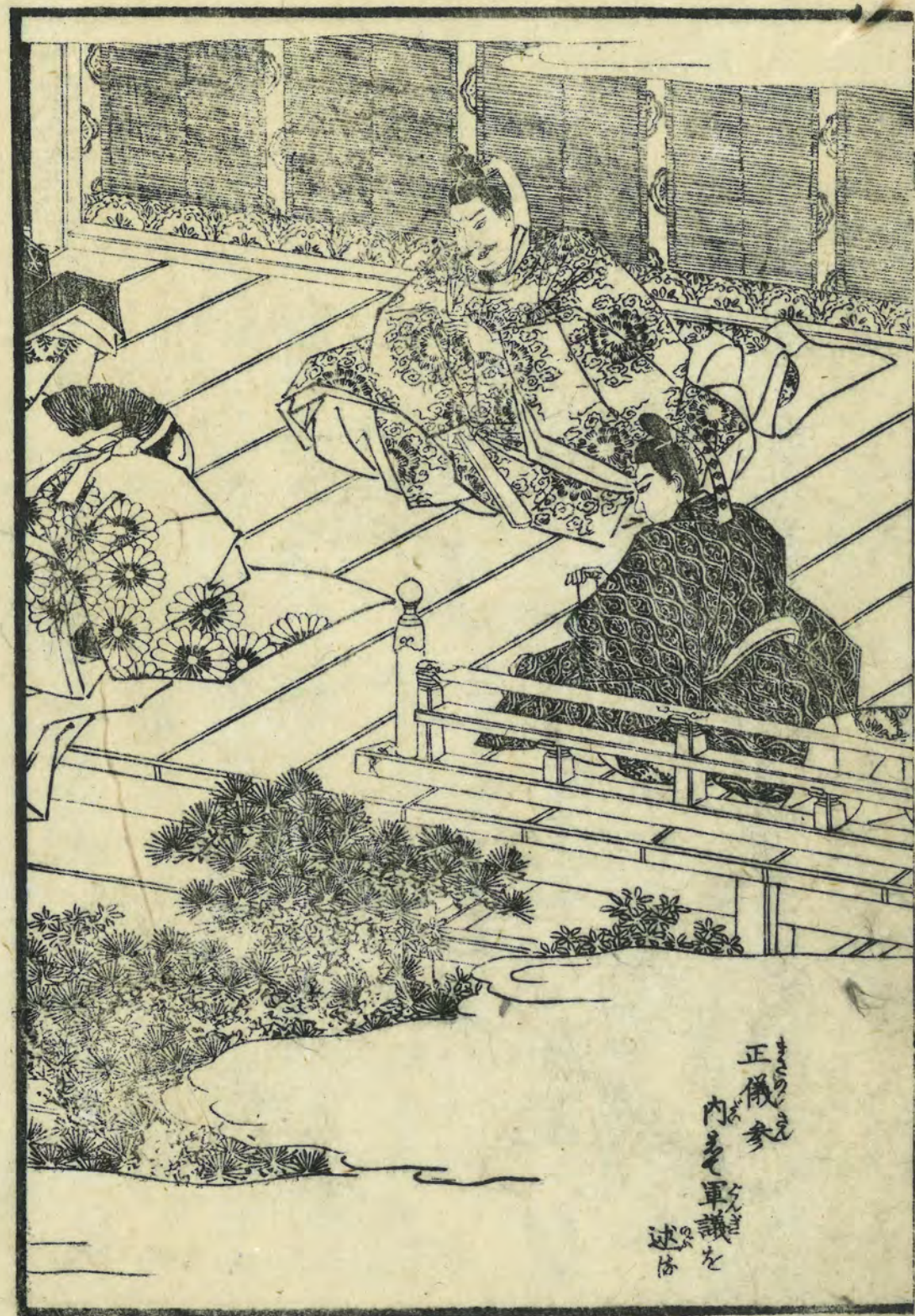
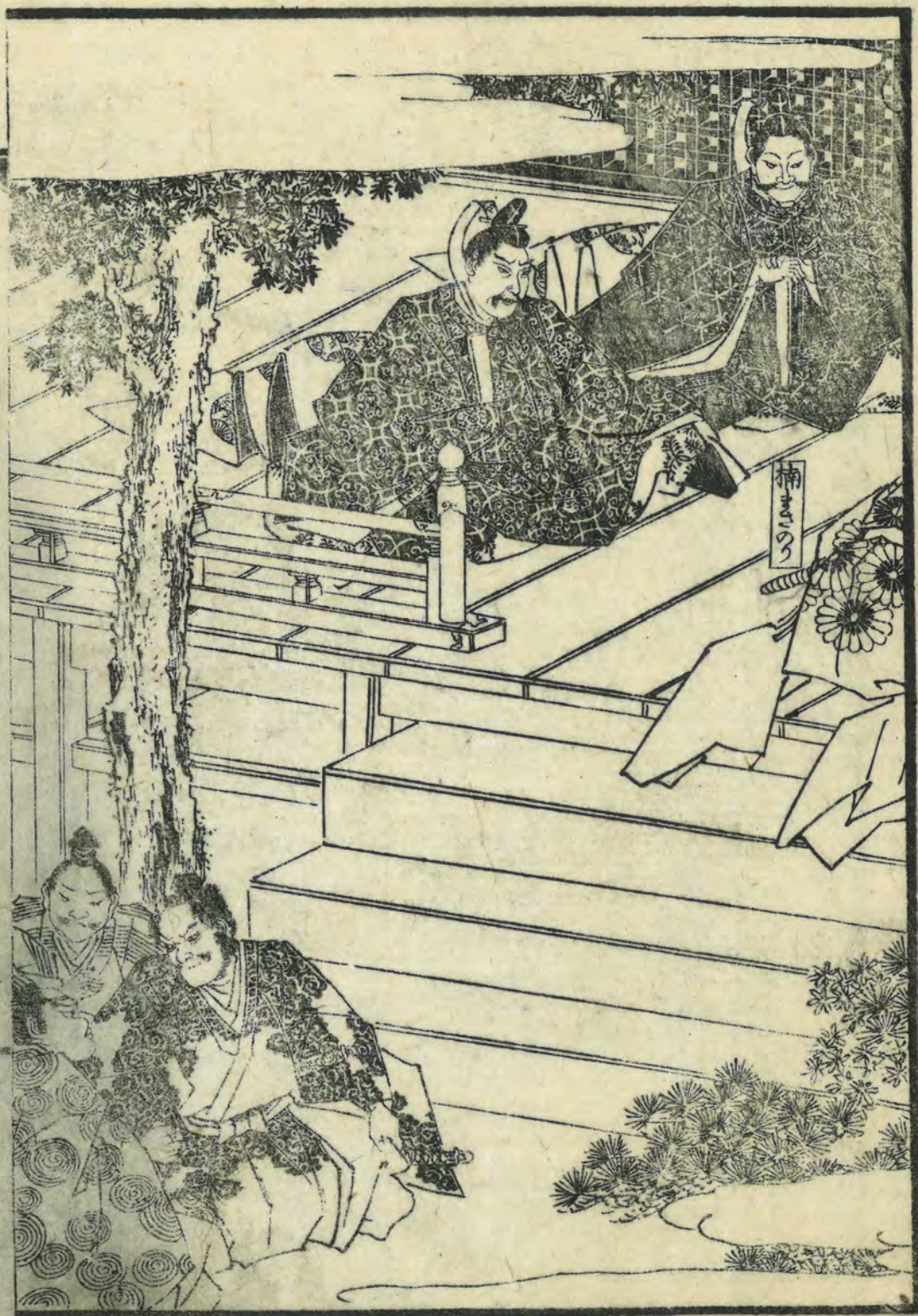
矣敵遂退歸

正勝十津川に漂泊の後小次郎正元東下。潛に將軍義満を覲ひ將に後援を
 求めんと。其の家の人としてを勸めて。正元を擁護して。義満の軍を斬て。

楠正儀の伝

合見正行河内四條郷に戦死の後師泰来つて千波劔を圍む正儀よく防ぎ戦ふ。ふ
れて軍を退け替くことゝを犯ひとなり。然るに觀應二年に當り山名師氏桃井連兼爲
小親きて南朝に屬き加之師赴と確執の事在于惠治。南朝に屬くこと
小園で尊氏父子或ひ東に出西に奔る。系師不安座を難く。翌文和元年にける。
より系師の兵寡く。若くの時官軍起る。一時に滅せんことと恐る。後詮偽て南幸と
相後とせんと請けまふ。南幸のまゝ欺伴て許容あり。車を男山に到り。後詮
こゝを藉らずして少く守備小怠る。ふ放て楠正儀北畠顯能兵を合せその勢八
倍誘ふ。暴に系師を殺せまふ。系兵大に潰れてこゝを防ぐ例計る。細川頼春戰
ひ死。後詮漸く近に小幸る。周て北畠顯能ハ本院殿。新院殿。主上崇。東宮仁を連
奉へ。賀名生に幽して三種の神器を。南朝に収めけり。

按るに建武二年八月尊氏 光嚴上皇の弟豐仁親王を立て帝と。倂て泰
て罪を謝し。誓書を作つて上へ。車を降し。又と請ふ。先帝ことと聽し。之を
然るに花園院に幽し。供奉の人々を禁廻す。周て潜にそと遁る。吉野に入て 南
朝と称ひ。ことより爲三種の神器を新主小傳へ。又と請ふ。乃新遷の劍璽鏡を
以て授けり。とある。時ハ今本文小の三種の神器ハ當ふ。その時の新遷る。朝廷
累世相傳の所。おの吉野に潜る。その時ハ。身を離し。ものとて。と
かくて系師の寂然として南軍を拒ぐの兵。然れども不虞の憂あるを恐る。南幸
の八幡小在て系師に入。その時尊氏閉塞あり。苗次許の軍に勝新田義宗ハ誠法親王
と義興義治謙念を去る。河村の城に入。より。尊氏後威を廢すと。す。後詮
ふり。二方誘ひ及びけ。と。後詮被り入浴。侍祇代之大寺に軍。南方のお隊分て。
と。と新に防ぐ。と。父ども衆寡の勢の相對せ。義詮大に勝利を得。ことと正儀ハ



正儀参
内多軍議を
述

備に在るを。東寺に陳して援兵を俟つ。細川隆興守四万の兵。二十を帥て来り。赤松
則祐もまた大兵を率て東寺に到ると。これに會ひ。是より長谷寺治清を廻り。細川に
軍兵。小和田正遠生年十六。八幡に詣りて志操を奏し。既而。すゝを遣き。正俊と兵を合
せ。二十騎を率し。荒坂を支ふ。細川顯氏清氏及び。大膳。夫の弟。悪五郎。等。六千餘騎
あて。これに對ふ。和。田。楠。精。兵。を。勝。つ。隘。路。に。射。つ。と。雨。の。如。く。衆。を。不。忍。に。編。む。を。看。て。惡
五郎衆を勵す。諸兵小先。多く。踊。上。り。和。田。正。遠。こ。と。と。閉。ひ。終。に。其。首。を。獲。り。我。れ。も
衆寡敵せず。和。田。楠。支。え。難。夜。小。先。こ。と。を。選。く。山。名。降。氏。地。加。る。と。敵。兵。の。く。法。大。少。て。
南軍防ぎ止め。ぐる。頻。つ。小。進。こ。と。八。幡。を。圍。む。時。に。城。中。糧。食。を。乏。く。奈。何。と。も。ま。る。こ。と。の。周。て
和。田。楠。河。内。不。降。り。兵。糧。を。援。へ。と。城。中。を。出。ける。が。正。遠。暴。に。病。を。染。し。治。療。達。に。終。ふ
卒。に。正。俊。の。凶。に。遇。て。戦。力。を。失。ひ。み。ま。り。援。け。ど。城。兵。の。く。圍。る。を。主。の。黄。泉。の。境。ひ。を
召。し。と。雜。兵。に。紛。は。て。落。る。と。後。延。文。五。年。十。二。月。畠。山。道。誓。後。詮。を。勅。め。其。の。勢。号。し。て

二十万との義詮の兵。七万騎。尾。分。騎。り。ち。脅。ふ。道。誓。の。津。く。山。向。ふ。兩。勢。正。不。雲。霞。の
ど。山。野。郷。村。所。々。と。軍。勢。あ。ら。わ。い。や。り。け。り。あ。小。放。て。左。馬。頭。正。俊。和。泉。守。正。武。を。援
け。皇。后。を。金。剛。山。の。眞。觀。心。寺。に。移。し。弟。其。身。の。二。百。騎。を。お。て。赤。坂。に。あ。り。福。塚。川
を。隔。て。山。下。五。百。騎。あ。て。平。石。城。を。構。へ。眞。木。野。洞。を。依。り。秋。田。等。八。百。騎。あ。て。八。尾。の。地。を
保。つ。此外。大。和。河。内。宇。智。宇。多。の。千。餘。人。の。兵。を。新。泉。が。峰。小。構。へ。高。樓。を。揚。石。壁。を。築。き。
觀。望。を。お。し。て。見。勢。と。あ。て。赤。軍。に。小。押。来。ま。し。と。も。楠。和。田。が。勇。勢。を。憚。り。城。溝。の
間。を。さ。り。て。進。み。こ。と。を。攻。め。と。欲。せ。ず。諸。城。を。圍。む。と。目。を。送。ま。す。

按。る。に。こ。の。時。の。赤。軍。兩。勢。合。せ。て。二。七。万。と。入。渡。し。と。も。賜。及。ぶ。と。然。る。と。正。俊。四。所。の。兵。合
あ。て。二。千。六。百。騎。十。分。が。二。小。段。ら。ん。然。し。と。も。道。誓。の。勇。勢。を。憚。り。攻。め。と。せ。る。楠。が
智。謀。勇。略。父。兄。に。劣。ら。ず。と。事。さ。べ。し。惟。歎。く。南。朝。の。聖。運。日。く。衰。へ。る。と。と。
かく。て。道。誓。の。弟。尾。張。守。長。深。小。二。万。の。兵。を。援。け。和。佐。山。不。登。り。し。む。官。軍。の。お。瀧。谷。守。等

義深を誘ふ為最初峰を退きて新門山に移る。敵軍退き散れぬと幸ひ進
 んだを圍む官軍懼はるゝと。敢て出て戦ひて、東兵倍倍のて、後退を奉て、上
 は。この時野伏千餘人尾傍不出て射る。東兵少く、御をえて、瀧谷、牝川、志貴、平
 野と、東門を圍きて、突出して、これを撃つ。東兵驚き、散れ、逃る。千餘町官軍
 退き、つて首を獲る。この戦をわづと、人通禁、味方の敗る。とて、若手、自由、大浦、今
 川、細川、左近、等、に、義深を援け、む、時に官軍に、共力せる。湯川、某、俄、小、愛、下、味方の陳、後、に、旗
 を、奉、げ、敵、軍、某、の、隊、人、と、ある。と、さう、山、兵、相、敵、ひ、勇、氣、壯、減、し、う、東、兵、機、を、得、て、連、に
 攻、む、城、兵、屋、に、守、り、う、と、を、捨、て、河、瀬、河、小、新、る、東、兵、凱、歌、し、て、帰、陳、ひ、と、え

按るに、この雅、致、不、至、り。國、ら、ざる、内、札、あり。故、後、良、親、王、の、子、母、北、畠、准、后、の、女、なり。
 幼稚より、聰明、あり。南、幸、と、を、愛、し、る、心、美、大、の、軍、に、任、ぜ、る、と、自、老、の、守、衛
 不、備、へ、又、周、て、お、軍、官、と、称、せ、る。故、に、新、門、山、の、戦、ひ、破、れ、官、軍、屢、敗、る、と、す。赤、松、彈

今、南、朝、の、微、く、さ、る、と、喻、へ、樓、の、如、く、美、ト、南、幸、と、執、て、北、朝、に、降、つ、と、その、功、を、う、け、
 唐、王、の、有、野、十、八、郷、を、領、せ、と、密、に、使、を、差、給、小、通、し、報、嵩、山、に、電、つ、と、旗、を、奉、安、名
 生、の、内、裡、に、火、を、放、つ。南、幸、大、小、謀、き、の、二、條、前、開、白、と、お、と、し、その、徒、兵、二、千、餘、報、嵩
 を、攻、む、官、旅、を、懸、へ、防、ぐ、と、ま、る、に、唐、兵、と、の、不、義、と、惡、と、官、小、徒、の、あ、ら、び、の、勢、僅、に、五
 十、餘、人、余、何、と、も、ま、る、と、あ、ら、氏、範、等、防、戦、し、て、敵、を、破、る、と、報、國、新、戦、ひ、場、で、南、軍、に
 降、る、官、更、に、難、さ、う、く、漸、く、道、と、て、南、都、に、ま、る、う

加、る、内、札、あり、う、南、軍、殆、戦、力、を、失、ひ、攻、兵、は、さ、さ、の、虚、に、さ、と、責、む、る、と、甚、急、なり。こ、小
 於、て、新、泉、寺、平、岩、の、城、南、兵、防、ぎ、戦、ひ、う、と、城、を、棄、て、退、散、し、八、尾、の、城、も、是、を、う、て、保、つ
 べ、う、さ、と、計、る、頼、で、守、兵、退、き、け、さ、さ、今、の、赤、坂、の、一、城、の、さ、さ、の、諸、方、で、降、る、と、後、兵、と
 合、し、赤、坂、不、通、る、補、和、回、力、を、竭、し、と、を、守、る、と、報、日、に、及、ぶ、と、攻、兵、は、備、目、に、信、し、て、防

樂の湖計を失つ。正後正式高嶺にて。この城を保つことども。遂に大車ふる。一日
退きて時機を圖り。起らふ如く。一夜に火を縦ち。備に金剛山の奥に匿る。
系兵督つて城小堂は。南帝大小周章。公卿百官。御を知らず。然れども。長詮通誓
敢て皇居を犯さる。兵を引て。系師小敗。乃て正後。兵を率を集め。同七月。天
王の山に上。後辺の橋を断て。香田の城を攻め。于時。山道誓。仁木義長。成功
小旗の満りを究め。入を悔る。と。情む。周て捕を退討。小假託。命令。侍。天王寺小
郷。ふ。和。田。捕。等。戦。ひ。て。兵。を。引。て。金。剛。山。に。降。る。と。も。道。誓。軍。を。解。ひ。長。詮。を。攻。め
と。以。義。長。を。大。小。忍。も。幕。府。に。到。り。長。詮。を。劾。り。道。誓。清。氏。川。等。退。討。の。四。教。書。を。清
う。けて。軍。勢。を。集。め。幕。府。を。守。る。道。誓。密。小。長。詮。不。通。下。女。装。して。所。祈。を。去。り。む。長。詮
元。来。義。長。の。威。に。怖。し。て。の。ぬ。き。と。速。に。谷。の。堂。に。赴。く。と。小。旗。で。幕。府。の。軍。勢。を。長。と。集
て。谷。の。堂。小。旗。義。長。詮。方。う。侍。勢。に。出。奔。し。長。野。の。城。小。旗。つ。う。と。主。波。作。木。等。多。に

攻む。義長防戦。快ひ。吉田中。御言。宗房に。就き。南朝。小降。り。和。田。捕。等。勢。小。旗
て。金。剛。山。に。起。り。河。内。の。守。護。杉。原。周。防。入。道。が。香。田。の。城。を。攻。陥。し。大。小。河。内。の。城。を。略。せ。り。
凡。小。旗。下。て。和。泉。の。守。護。細。川。兵。林。大。捕。等。ひ。と。と。泉。及。を。退。散。せ。り。と。も。以。周。て。河。内。和
泉。紀。伊。の。諸。城。南。帝。に。奉。し。捕。大。小。城。威。を。震。ふ。と。小。旗。清。氏。の。三。子。元。服。の。と。い。ふ。竟。に
叛。き。て。南。朝。に。降。は。南。帝。と。ま。を。内。て。大。の。印。を。賜。ひ。さ。正。後。力。を。合。し。と。系。師
を。攻。め。さ。う。令。ぜ。り。は。下。正。後。奏。し。て。今。賊。徒。我。小。利。を。得。て。守。に。怠。り。い。ち。攻。む。る
則。て。忽。ち。下。さ。え。と。清。氏。力。を。假。小。及。と。も。臣。と。ま。を。慮。る。に。延。元。の。始。め。又。正。成。等。尊。氏。と。退
下。し。西。及。へ。奔。ら。せ。り。と。賊。徒。官。軍。の。為。に。攻。ら。し。と。系。師。を。去。は。し。都。て。五。回。然。と。と。大
下。の。諸。卒。猶。皇。天。を。戴。く。者。と。官。軍。系。師。不。止。と。う。今。義。詮。を。逐。退。け。夫。等。系。師。に。幸
い。と。も。官。軍。不。興。と。る。兵。寡。さ。則。に。守。り。と。う。功。を。き。所。為。と。存。び。と。時。機。を。圖。り。奏
し。け。し。と。南。帝。更。に。聽。の。ま。を。周。て。和。田。捕。止。む。を。得。た。清。氏。及。び。赤。松。範。実。細。川。氏。春

源尊氏 征夷大將軍
三條權太監

人皇九十九代 後光嚴帝貞治六年卒
今安政三辰迫 四百九十年成

三位大納言
基氏キキ 右馬頭ウマカブ 從三位

氏滿ウチミツ
從三位ササキ左馬頭ササキ

滿三力兼左馬頭
從四位下

持氏王季子
從三位左衛門頭

傳へり。其詮の書に、他人の爲に募集せしむる人にて、若し尊氏二男、基氏、小園、東を總督せしむ。將軍を輔佐せしむ。然るに其詮己に勝るなり。毎に基氏を疑ひ、因て基氏神に祈り、早世し、その疑ひを釋といふ。時、基氏、友人あり、と知るべし。

足利基氏の注

將軍尊氏の弟足利左兵衛督直義軍功歴るに因て當時政務を掌はれたる
職なり。然るも高師直兄弟もまた運致の功小結るに執事として權を掌る時小直
上杉重持畠山直宗と相誅つて師連を殺さんと此の事奔告して師連兄弟
を引いて連義が館を圍む連義怒りて幕府に奔る師連兄弟も幕府を圍む尊氏
須賀を攻守として師連に細をむるに義親祖義家初辰天下の武將なりより
汝が祖義家に仕へて一日君臣の大義小信らば然るに汝今小忿を懷き我を圍て大義
を失ひ縱我勢力教せ以己に怨を被るゝとども汝が後賴天祿を遣下と師連こ
小討へていさ。君臣と上及小起してより。臣等君の後に在る百戰百勝堅きを破り。後
碑くとの勲功孰く肩て死すべき事と今汝に信下臣が法を誅せんと以て罪ある
を謝せんが爲に恭しく向ふ所なり。君臣より以所を奪て上杉畠山を遠流し。此後

政務と傳らる。君小率へんて元の如くのごと須賀こまを報令以て尊氏上杉畠山を誅
後に流し。連義が執政と傳めけり。この故に義親と謙倉より京師小直直義に代りし二男
基氏と謙倉に遣し。東國の法と上杉憲頭を以て執事となし是より基氏謙倉に
在て叛く者あると誅し。大に武威で漲けし。東國も風小應下多く謙倉に属する小
より子威權八及び農の關東管領と称けり。然るに文和元年の春新田義興殿屋敷治信
濃上野の兵と卒し。武義野に軍以尊氏とて征さんと躬大軍で帥て謙倉を奪し。新田
の軍に對しけるが。一戦小敗也。是より脱して石濱に奔る。仁木頼重等不意に突
新田の軍敗る。本國歸るが。連下謙倉へ攻入るとき基氏の後權南遠のふ。ここと防ぎ
く軍利あり。折部軍勢不逞より。基氏を奉じて是より石濱へ奔りける。後興義謙
倉に入ると威勢關八州小揮ふ。時尊氏大軍と卒し。箇次嶽小義宗と退け。尋て院會で攻ん
と以義興對するが。兵と引いて河村城に入る。是後こをも引退けし。尊氏より

基氏を措て関東と總督せり。畠山所波が監國清て以て執事と以て畠山と道誓執る
 の時將軍を詮基氏を嫌忌り及び道誓の虚に威を震んと基氏で脱て上洛し南軍
 と合んとし後給てまゝと納て大軍と率し赤坂城を攻むるに脱小正儀が傳にり長し
 道誓を諫念に傳り。その修を逸し己に従ふ者と堂庸の従はざる者の疎ト斥く。こふ故て諸士
 運署をて基氏に紹へ道誓が罪を責む基氏仍を遣りて大に道誓を遣責し道誓陳
 謝するに結を以て尾張守を深と共に。諫念を去て伊豆の修禪に擁護するに後負
 治を率六月上杉憲頭を執事と以て。この下に因て芳賀入道禪可大に怒りて上野の板鼻小
 軍に基氏を大軍と率し。禪可が軍と武及小敗る。この事蹟傳長けり。こふ故て
 してこふ記さびに呼是利氏のみ家族を交殺するに能く録をとりて看ぶべし

日本百將傳一々話卷之十 終



出川内持